



「聴覚障がい者でも、明瞭な発音ができる人はいます」



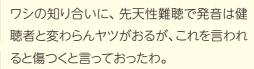
相手から聴覚障がいがあると告げられたとき、その割には発音が明瞭だと驚いたことはないじゃろうか? 思わず「普通に話せているじゃないですか」と返したことはないかの? 聴覚障がいと聞くと、全員が特有の話し方(いわゆる難聴なまり)をすると思っておるかもしれんな。



しかし、それは間違いじゃよ。

聴覚障がいと一□に言っても、その程度や タイプは人それぞれじゃ。

このあたりのことは、中面の大沼先生の説明を読むといい。



「普通って何? 聴覚障がい者は発音が明瞭ではダメなの?」と聞き返したくなるらしい。ま、コイツは少々ひねくれ者じゃが、言いたいことは何となく分かるのではないかのぉ?

今回のポイントじゃ!



『一人一人に個性があると同様に、 聴覚障がい者も その程度やタイプは十人十色!』





難聴の種類と特徴

聴覚障がい者のコミュニケーションの仕方や聞こえ方は誤解されがちです。 "聴覚障がい者は全く音のない沈黙の世界にいる"、"手話を使えば聴覚障がい者 は誰でも話が通じる"、"補聴器を着けているから話が聞こえているはずだ"など です。難聴をひとくくりにしてしまうと対応を誤ります。難聴にはさまざまな 種類と特徴があります。

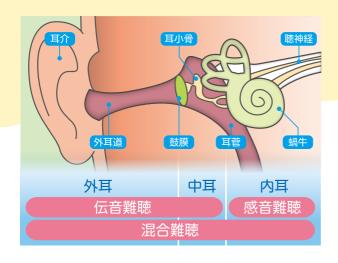
- ① 耳の中のどこに故障があるのか(障害部位)
- ② いつから難聴になったのか(発症時期)
- ③ どれほど聞こえにくいのか(難聴程度)

の観点からそれぞれに異なる特徴があります。



1) 伝音難聴、感音難聴、混合難聴

耳介から入った音は外耳道を通って鼓膜に伝わり中耳に導かれます。この経路のどこかに障害がある場合は治療により"治る"可能性のある難聴です。 外耳道に耳垢がびっしり詰まっていたり、鼓膜が破れたり、滲出性中耳炎により中耳に水が溜まっていたりすると、音の波動の通りが悪くなるので聞こえにくくなります。これを「伝音難聴」と呼びます。テレビのボリュームを下げたように、普通に聞こえていた音や声が小さくなります。耳栓を付けたり指で耳を塞いだりした状態は、伝音難聴の聞こえを体験していることになります。



中耳まで伝わった音は、さらに耳の奥にある内耳に入ります。音の感覚刺激を生み出す内耳の蝸牛から聴神経に至る道筋のどこかに障害がある場合は "治りにくい" 難聴です。これを「感音難聴」と呼びます。感音難聴の聞こえ方は先に述べた伝音難聴のそれと異なり、単に音が小さく聞こえるだけでなく音声に歪みが生じ不明瞭になります。そのため、音としては聞こえてるのに何を話されてるのか聞き取れなくなります。高齢者の耳が遠くなるのも感音難聴の一つですが、加齢により伝音難聴が加わる場合があります。伝音難聴と感音難聴の両方の障害があるのを「混合難聴」と呼びます。

2) 先天性難聴、中途失聴、幼児難聴、高齢者難聴

生まれたときからの「先天性難聴」、あるいは乳幼児の時期からの「幼児難聴」の場合、耳で聞いて話すことを学習しにくくなるので「言語獲得前難聴」とも呼ばれます。音声言語を獲得した後の「中途失聴」は、話すことにはあまり不自由はないが、聞くことに障害が生じます。

聴力は30歳代から低下し始め、加齢とともに徐々に聴覚機能が減退し、65歳を過ぎると「高齢者難聴」の人□割合が急激に増加します。しかし、高齢者は「自分は普通に聞こえている」と難聴を受け入れにくい傾向があります。また一方、難聴は足腰や目の衰えに比べ周囲の人から"見えにくい"障害なので、本人がどう困っているのか理解されにくいという問題があります。認知機能の低下がある高齢者では、話しかけに対する反応の鈍さの原因が難聴によるものなのか区別が困難な場合もあります。

3)軽度難聴、中等度難聴、高度難聴、重度難聴、最重度難聴(聾)

「軽度難聴」(25 ~ 39 デシベル) : 小さな声が聞きづらい 「中等度難聴」(40 ~ 69 デシベル): 普通の会話が聞きづらい 「高度難聴」(70 ~ 89 デシベル) : 普通の会話が聞き取れない

||高皮難聴] (/0~89 アンベル) ・ 晋連の云話が闻さ取れない

10

20 木の葉のすれ合う音 軽度難聴

[重度難聴] (90 デシベル以上)

30 鉛筆での執筆音

40 図書館内

50 静かな事務所の中

60 普通の会話、走行中の自動車内

70 セミの鳴き声(直近)

80 パチンコ店内、走行中の電車内

90 犬の鳴き声(直近)、カラオケ音(店内)

100 地下鉄の構内

110 自動車のクラクション(直近)

120 近くの落雷、飛行機のエンジンの近く

dB(SPL)

▲ 重度難聴

: 耳元で話されても聞き取れない

高度難聴

中等度難聴

※騒音目安参考

難聴の程度 (平均聴力レベル) はデシベル (dB) で表され、0デシベルが正常者の聴力になります。聴力検査で最大の検査音を出しても聞こえないような難聴程度を「最重度難聴」あるいは「聾」ということもあります。なお「ろう者」とは、たとえ残存する聴力があったとしても、自ら聴覚に依存せず手話をコミュニケーション手段とする聴覚障がい者のことです。

監修・著:大沼 直紀先生

医学博士(聴覚障害学)

国立大学法人筑波技術大学名誉教授・元学長東京大学先端科学技術研究センター元客員教授教育オーディオロジー(聴覚障がい児の聞こえを補償する科学)の第一人者



大沼直紀の「ちょっと小耳に」

【デシベルの話】

音の「大きい・小さい」「強い・弱い」「高い・低い」の意味の違いを意識 せずに混同して使っていませんか。ピアノを弾くときの指と鍵盤に例え れば、指を下ろすタッチの勢いが「音の強弱」です。この「音圧」をデシベ ル(dB)で表します。そして、左から右まで並んでいるピアノの鍵盤のど の位置を指でタッチするかが「音の高低」に当たります。この「周波数」を ヘルツ(Hz)で表します。

そしてさらに、音が「大きい・小さい」という言葉には別の意味があります。例えば、ピアノの右端の方の鍵盤を指でそっと鳴らすと「高くて弱い音」が出ます。この音を加齢難聴のお年寄りの耳が聞いた場合、「小さい音」だと感じられます。同じ音が若い健康な耳には普通の大きさに感じられても、難聴の耳に小さすぎて聞こえにくいと言うでしょう。

音の「聞こえ方の大きさ」は個人の感覚によって異なるわけです。そのような難聴の程度を表すのにも「デシベル」という単位が使われます。聴力検査で、ある高さ(周波数Hz)のある強さ(音圧dB)の検査音が聞こえたと感じるレベルを「聴力レベル」といいdB(HL)で表記します。

難聴の問題とも深く関わった電話機の発明者グラハム・ベルは聴力計

も考案しました。オージオメータの原形となるこの業績により音の強度を相対的に示す単位dB (デシベル) が生まれます。大文字のBはベルの名前を記念し付けられたのです。







責任編集:塩野義製薬 CBF-PJ 禁無断転載

© 2018 SHIONOGI

CBFPJ-V-001 (A1)